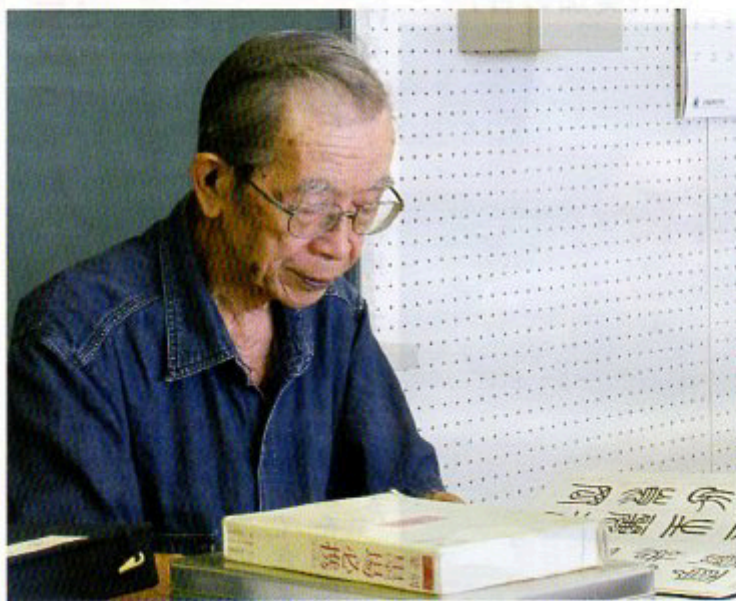


90歳、公民館で篆刻の先生

本職の農家さんのように毎日車に乗って畑に出かけ、公民館では篆刻の先生、自治会の役員選出で広報部長に手を上げ、福祉委員会のふれあい喫茶では謡を披露、70代にしか見えない若松勝二（わかまつ・かつじ）さん（荘園町）は、なんと90歳。元気ハツラツな生き方を紹介します。

小学校4年生まで鹿児島で過ごし、父親の仕事の関係で大阪・築港に移転。15歳で南海電鉄に就職、電気関係に携わり60歳定年まで勤め上げた後、高島屋の照明や催し物の設置を請け負っていた戦友の会社に再就職、70歳で退職。



高向公民館で教える若松さん

若松 勝二さん (荘園町)

「車が運転出来る間は教えていきたい」

第2の人生として千代田公民館のペン習字クラブに入会していたが、高向公民館の毛筆クラブにも入会。作品展に出品する際に必要な落款を自分で作ったことから、書道の先生から「生徒さんに教えてあげてほしい」と頼まれたのがきっかけとなり、クラブ内に篆刻の同好会を結成。篆刻作品も出品することになり、わずか3年で篆刻クラブ「若菜会」を結成。



若松勝二 印

6月の習作展に出品した作品

「南海のいい時代だね。クラブ活動が盛んで書道を習い、会社帰りに篆刻の教室に通っていました。謡曲部にも所属してましたんや」。

謡はキャリア20年の朗々とした声をお祝い事の席で披露し喜ばれるそうです。

「篆刻は失敗してもやり直しが出来るからいい。サンドペーパーで削ったらいいし、欠けたりしても、それが『いい味』になることがあるから面白いんです」
高向公民館で月2回（第2、第4火曜）の活動。「一人ひとり細かく教えてあげなければならぬので手が回らないこともありましたが、一緒に学び、自分自身が一人前と思ったことがないから苦労と思ったことはありません」。

昭和16年1月、電気設計要員として海軍に志願、17年12月に設営隊でラバウルの南方にまで進出しましたが、米軍に押し戻されブルーゲンビル島で終戦、生き残ったのはわずか25%。21年2月25日に本土に帰還、鹿児島で百姓したり、アイスキャンデーを作ったりの生活から25年に南海電鉄に復職、中百舌島に住んでいたが53年に荘園町に移転。

耳、目はしっかり、背筋もピンとして90歳とはとても思えない健康体。近所にある畑に毎日通い色々な野菜を作り東京、広島、鹿児島への親戚に送っています。自慢はニンニクで大変喜ばれているそうです。

「毎日忙しい、忙しい。車が運転出来る間は教えていきたい」さりとて言うのける姿に感動しました。

(金子 征二郎)

70歳から畑など第2の人生を楽しむ